

語の如きは、物質本位の教化を施すといふ意味は少しもありません、すべて道徳的であり精神主義の聖旨であります。又吾々祖先の遺風は決して物質本位の文明に馳せたものではなくして、祖先以來大和魂といふは決して物質本位ではない、高潔なる道徳を以て日本人の本領として居るのである。所謂君には忠、親には孝、夫婦の仲にも敬愛あり、又社會の間には義侠を重んじて來たのである、故に舊來の劇は頗る道徳的のものである。今日の新派劇であるとか、新しき文學のやうに淫靡なるものではない、唯物的なるものではない、非常な高潔なる精神的のものである、それが祖先の遺風である。それ故に本末輕重を明かにするには、この祖先の遺風を益々發揮しなければならぬ、今日のやうに法律學者、經濟學者が利益權利を力説し、文學者が物質生活に流れ行くのは違ふ、今日に於て精神的の方面、宗教の方面、理想の方面に働く者を尊まないとはいふは、即ち國民の思想が本末顛倒して來て居るのである、又それ等の人も考へなければならぬ、自分の立場が法律であるとか經濟であるならば、吾々の事は如何に言うても是は末のことであるから、更に高き宗教道徳の先生の話を聽かんならぬといふ位の事は附言しなければ、人に物を教へることは出來ない。

又教育勅語の内容に入つても、是が本末を明かにしなければならぬ、即ち種々ある徳目の中に忠孝といふことは日本道徳の最も大切なる點であつて、さうして忠は更に大事なことであるから、義勇奉公、皇運扶翼といふ事が最も大事なことである。形式は忠で現れるのだけれども、その皇運を扶翼する所以を忘れてはならぬ、皇運を扶翼する所以は、即ち祖宗建國の大精神を實現するのである。皇運といつても唯だ皇室の御運が盛んといふことではない、皇室は祖宗の皇謨を奉じてこの建國の大精神を進め給ふが爲に、時に陛下が戰場に出てて砲彈の爲に斃れ給ふ事もあつて宜いのである、唯だ皇運々々といふ事を形式にのみ解釋してはいくまい。即ち神功皇后の如きは女帝であらせられても、自から軍を帥ゐて戰場に御出征になつた、不幸敵軍の爲に萬一も斃れになつても、それは即ち皇室の天職を盡し給ふ所以である、モウ少し徹底した